續撲囊注解　全

俳問理

続猿蓑は七書乃部類にし
あらされとして老父の省記
すて置る集なりさるを大鏡
撰釋乃扨かゝよろしくは書
くさして弥反吉乃古くし
是を以まて捨ものむと
あけかたしく是誠甚さむと

すれそ父すまゆるけんやさと
ら門人誰かれとふし合せ
ひそやかの不音厕氏よ読して
小冊となしぬ父よろこひすと
いへとも毋すて祖翁乃俳諧を
継よおかのれを敢て呵責
乃沙汰よも及すんハ子ら
本の何我是よすきむやと

同盟乃諸子とつのちからを
永く蔵していさゝの風流
乃助けとなすものなし

尺木堂八公石

続猿蓑注解

月院社何丸撰釋
天木堂公石著

八九間そらて雨降る柳かな

西華坊云此句よ尚説あり
去来曰我もまた
坊云嘗きんあり 木曽塚の旧草よありて或人此句をと
問て云見え難し此柳ハ白髪の古翁北窓の松皮蕎の如り
よりも中枝うちたれてさしおよその八九間も空よひろごりて
まる雨の降るふとぬれりきあしむとかられハ翁ハ陰の
あふさうりありそれと見ておろしてさりや大仏のあたりそれかる
柳を見給ひるとかきされし
ろ続猿蓑よ出る篇の参加る

更よふ縁りて春雨の降らぬ日しきと浦して定めるを
去来曰我ハ秀秋の年如へし分別叢よあらそてこの
其柳の高三ツ有るを見るきみしと有しを八九間の柳
さる風情ハいつこまの侍りしやしそれハそよ大仏乃
あたりなりしすやけりしとや翁もそこえよそ笑ひ玉へり
浪花舎云雨ハ去へて一二間降上あしそハ見くぬよの木あれと去
柳の糸の白つるさ液去雨をとひて見る時ハ八九間の上よ
てる程去りて雨と見ゆるとつてくく見たるよりしきやうや
あしむと此説も又さそかくく著よ記す 以上説叢大全よ見ゆ
一書よ曰陶淵明か俳因園君詩よ曰方宅十餘畝草屋八九
間楡柳蔭後簷桃李羅堂前とかゝるうちを翁ハ見給へし
上よかの大仏の柳をもそひ合せそて所时の盛偶の吟となり
此句ハ只八九間はかりの高さし雨の降るし此不俳諧に柳を
雨と見るなり

一書に曰柳は雨しとりや青の如く深て時しく日の陰りはれて
柳の糸は楊さへ八九月も冬に雨の後ん秋とも何とも柳く象
曲のすくれたるは是ろ或桃信の来りて梅柳ハ八九月去るく
見ゆるに詩人の常之よりて八九月中をを座れるうと云こ
一書に云柳の糸は風にたなびきてるあらさに八九月も冬に
画のみなりことのえなり

一書に云此句宗くの説数多あれとも悪しく用ひるべし只其色
の移りなるさ許しそめ句之九ハ老陽の数にして上ミ下し而て
ころきさと九天といひ雨をころきより後すの如く柳の移りなるさ後
八九月下より後へいひ叶ふるありしとなし
一書に云器しく八桜の雪やら冬によふてまとめてよめる貫之の和哥
に叙して盛実の花おそ蔵はせり冬もいよむろ見えるの句之
並の笑みに小将理ておりしうえ
何しくまろつ茶とし　門の書付

一書に云蕣訓ハ竹下の三還を含く語句しなへなや　継柳
限りなくおうしみえ来なり
やつさよ星はハなれかゝまらぬ
川立て柔柳に桂まるるたゝ中のさ
一書に云隠倉に露つくる柳女の面影なといふたぐひの態を
嫋くめる嬌態のうちに絶られされハこそ見物の人の魂
情をつけて云旅しられ
露訓秋の経なる經　かへし
産路乃鬼子女房　なり
云味重云ひ是備に云畢一の鬼子に始五の九月
「哀席にむのふれし川里云はに
きのふの秋と経かそりな毛の付なり
いさゝ立磨川すゆる何しし外
冬のまうきさ乃霜たなりし施

一書に云草指南眼疾よりつゞる風情なりしも蓋朝露集に
西華坊が斧鑿の痕を見す
　削かけに苦力坂の冬社風
一書に云京黒谷と鹿谷との間に此坂有りて文廣亭の
為の方にありといふまゝに考ふべし
　俳韵さぶらふ錦の雨
　うき旅を賜ひつれ泣濡り雪
一書に云人商人のまゝに暮し女童の風情なるとみる
つきをう
　柳の情へ門をたてたり
　百姓に知らぬ世話も苦閑さよ
一書に云五柳子の郷へ至りし趣を含めるや
　桔梗にかれる霜かな松露に
　日ハ暮れし辭す本岡

一書に云巳が名の前集に洩るゝを比興しけるなる
らむも惜く辭に櫻を忘れし趣を含めるや裏に洩るゝ
の言より落花をすて此葉とかけ合せましてしまし
らの題にしたて自然をも出せるに浮桜薄におもしく
して
香味堂云香復法師の雑談集に
　同集のうつふつゞくしきものみえくりなハ
　　櫻が松露の香甜しける
の意もあるや
三草紙に曰伊賀の連衆翁の出國に書のなるならい
諸念しと願によりてまかれ給るゝつきさと撰ひ
發句も僅に二百計書くるまゝ完板もせまやと省
しに元禄年中大坂にして没故ありて元禄年中止に
より全部ハ其讓の落持が盈曲集を乞立祖なるを

増補せるといふては脈の句もちらへり猶あまた氏
好ハいつかし翁の滅後の句なとも多く出せりとて
不審之といふく思考するに此集何人の撰とも
なりをさしおもひて書を今翁滅後に至て猶わさし
たる集によりて七部の列にそへつら〻て附に続猿蓑の
題号をつけしハ此句を社巻頭にかかれ之を見れ書んとの
座の願をすなはちき出つらきあらせましし古れ刊行徒
か後補の基となるきさうことを世に流布して深川集
と入らく七部といひける人もありまれて実者の伐
乱しなけるたる人の一つの筈をしめ深川集の例説
にて称するところありまとしなきも一ツの疵あり先哲の隠
評日
家頌うしも　征鞍うち　来る　嵐葉
山伏と切らしりける　関の茶　翁

そく　卮

猿　かくれぬハなしぬ　世の中　酒堂
此山伏の一句を翁生涯の秀ぶりしといへり阿覚の
関の持抜きそ能狂言の文句にあまりしも二人山伏の我
切らうけて作らく只おもはしみて称人とかかえて猿
猿されも数代の意味あらしくおもひあって俳梅
勝と謂しの始終としつや
大切な日つ二日ある　暮の　鐘
雪かきわかし　中の　泥　こち
一書にいふ門人に貴月の法令あるよしと記れり
ときく
一書にいふ二敷の令日くといふく
かくるて　市の中しと　押　合そ
此あまり浮もふハ花のけもなくして
思考するに此あつらと引きしかるなと市といふ

字あると眼に附けり帝ハ大和尚上帝下帝是帝の始
まくらことはしめかしこく畜白へかまひて二句の尾に
髪を入れぬ所なくし 又曰帝ハ聖徳太子大和国
三輪の里に立神ありて農家の者日々にお葛る帛丹
に六秋にて定く佛法を守しめる人

帝 賞賦

賦ハ布之給与也分界也責取也善悪ともに此身
陳鋪之事をのべて其情と形とを尽し明白に形容
して其述る所分明丈夫なし 譜に賦とのあしらひに
似て例あ文章をし 朱子曰直指其名叙其事之葛
単寒耳に顕是也
衣裳に湖光の秋をと含む
一書にいふ 林氏誌として倉衣裳湖上秋

志も〳〵 牧〳〵之

そこ〳〵 心〳〵之

僧にして僧に似ざるもの
鬢僧之頃のうしろに一撮の毛を残し置なり
晋書白蓮社記曰在僧在俗俗而在似僧者
其交の深きものハ沙門の衣を脱し小袖を
ひきかさね〳〵縁かしこ衣ハすそうしの
且味なくして人に絶るまじき事
管子曰与人交多詐偽無情実偷取
一切謂之烏集之交烏集之交初雖相驩
後必相咄

支考

且考荘子に曰君子の交淡如水小人之交甘如醴君子淡以
親小人甘以絶彼無故以合者則無故以離
かくてなりしくに立わかれそいはりけり

抔ひとむかしかしむ
愚考杜律ニ曰明年此會知誰健
罰盃の数しるを呑せしむ
愚考李白か金谷園の杯にして至の数三斗之とそ
王義之か蘭亭の會罰酒者十六人各詩成不○楚恵王
使ニ群臣作レ詩至吟給ニ罰盃ニ
箕の数や崩れし晩し冷しめ
一書に云水盃を含める洗し物を八謎句しまひけらむ
又組の須秋にも池のすみなる洗し物して附なす
くしるとて愚考此にひやせる洗しものにハあらく
貴洗し崩れての細にも晩しおそ櫛先まし
しんきまきぬ
義て工まつとしてる照　降
おれか事奇にしよまるく櫛の書

掛錦の数にまる月さし也
一説に曰ろとのうるに津の出や志賀の里れ橘すまく
義の歌くの歌にまれ月のうも
一書に云義の第日ハ必日和之く請まもいハれハ照降を
義て工夫するも理之次ハ千人を橘すと見得るまそ別
の論の人を勢させるを橘すおしおこうまし こさ男
まておれをいひしきものうかおりけそ出れかめハ
何の橘するとのもしすると奇にもよるかまくみと
客より人をあきうさまの数は義て日和の工夫とも
まうるへし
愚考義の第日必日和なしハ照降の工夫に及すまし
義至より前に晴陰ハ日和ハ四つより後に晴けハ降る
とるてよりて工夫を借るものく数け日和を工夫するる
ものの宇治の通意なるく見へく橘の書くハうけ

さりけりうちあるくよしつても蕉師の媚ぬへしらん去
来が號擬の心附なきハ費三の句に對て第一照應の
工夫とす月まて定め季も月まて定め治橋の季角
を定めお備ハ素乃備まてハなく通象か本像真の
お備なきハ新しハいそれす每象か本像なかりゆくに
平生明鮮しの持備の新しハ作らるもの之変有
おのて照応の手趣に又月の影ハなし中の句の人
おもの菜様に偏くゆくに三句の返りしハやなり
天文志曰鳶高飛而定天氣

春時にて又見む月か初さくら
一書に云古来に「見つくして春むかすれはさくら花
月のあれてふあらさるらん

新に似あ發句もおよ初撰
葛考杜子美が詩に曰爲人性僻耽佳句語不驚人死
不休老去詩篇渾漫與春来花鳥莫深愁新に似あ
よきさ句もあよハ三句の趣之春来れハ花咲鳥鳴らん
春来花ハ則是初撰之意味深重出るへし
或人難して曰詩の心にのみなりみて俳諧の表とする
新おかるへし
陳して曰撰ハ家紙の花なれハ佳句をもとめ一句に
人を驚さむとくん実に俳諧の表ハ旧然とや
又難して曰詩の心を旨の假に述べて杜子美が糟粕
なふあらさや
陳して曰詩の心旨の假に述るか到色人の手段なり
古言廿八字を僅十七文字のかなにつゝめる趣しき
所又あるへくもあらさるへし　素人岡口

寄せたる酒店に於て文君か爪音も
琴の手きれに思ひ出らるゝに

酒部屋に琴　の音きく窓　の花

愚考史記に曰卓王孫至日中謁相如長卿謝病不能
往臨卭令不敢嘗食自往迎相如相如不得已彊往一坐
盡傾酒酣臨卭令前奏琴曰竊聞長卿好之願以自娯相
如辭謝爲鼓一再行是時卓王孫有女文君新寡好音故相
如繆與令相重而以琴心挑之

人の音もかく窺ひし　まつ　梅

愚考窺ひしと修すへし人の音もかくのしくら
かふらいやしおのれ独り窺ひしと花に物の志
窓ことのあらまる句なり

菎蒻の名物とも山　さくら

愚考菎蒻の名物ハ近江足津の里とかや申すと

下総の佐倉より献上の一品にして形丸く大小ありて色黒し
方のむかごそう菓子とも云之佐倉の名物によりて八番
下総なる名

咲かゝる　花や　飯米　五十　石

愚考句をとりて句にするものゝ岸俵の内五人扶持
取てまつる柳外柳ハ五人扶持の位なれ小庭に有さ
彼なへし梅むハ士以上の庭なりして五人扶持乃
五をのまさんとして五十石とハ積ぬきてむものなくハ
しくハ岸俵の註に従ひてるの之

八重桜京にもらつる奈良菓外

公石云いましへ乃奈良の都の八重桜ハ九重に白ひ
ける外の奇の借穀さらにや

甚もやけしきとくの月と梅

愚考宋詩の句姚宋佐か句に梅花得月大清室

里坊に雉きくや梅の花

愚考 慧能和尚行ニ黄梅ニ師ニ五祖弘忍大師ニ為ニ行者一在ニ雑坊
杵臼之間ニ於ニ是大悟受ニ衣法ニ嗣ニ為ニ六祖ニ唐憲宗皇帝勅
謚ニ大鑑禅師ニ

鶯に長刀かくる茱萸の部

一書に曰 鶯の足踏ちからて細脛を大長刀にさゝつて
かけりやしなふる事の侍之と云く
愚考長臥九の隣に

大長刀にもる風そふく と云白に

鶯乃細脛猶の掃らつらむ

長刀の事ハ武用弁略に白薙刃を元来太刀なり
それにおしく柄をつけて用ゆる故に長刀と書之
されハ長刀に限りて一振と云旧述考録に曰光仁帝
呉城の兵器に擬て作らしむ平清盛公長刀の刹と

定むして一門皆是を用ゆられよりして金族の兵器
となる

鶯や柳のうしろ藪の前

愚考 鶯ハ竹に生れ柳ハ正月花鳥の景物に
して何れも鶯の縁にのりきさる前後に柳と竹
をあさされとりしと見ゆ

芳野西河の瀧

鮎の子のれんすさまし瀧の音

愚考 二ジカウの瀧と唱ふるあり 五類組に曰凡魚之
游皆逆ニ水而上ル雖ニ至細之鱗ニ遇ニ大水ニ亦搶而上ル鳥ハ風
に逆ふて飛行す

山吹や傾りしれし坐る篭一年

一書に云 七重八重花ハさけとも山吹のみのひとつ
たになきそかなしきといふ事の気よりやあらむ

小腹綿に光をやどせ玉椿

愚考小袖綿ハ柔つなむとの名なつき十徳に似たる照衣之光りと八則光明なり阿弥陀の光明ハ十二光明之利摂衆不捨の意之（久安百首に）安藝

玉椿光残みらく君か代に百かへり咲うゑむけの花

振かへりけりや廣野の麋の角

愚考淮南子曰陽之至是以春則群獣除角

え月や表深き衣のうら表

愚考詩に曰東方未明顛倒衣裳顛之倒之自公召之

又ま木集にさる法師に衣裳のうらをいたまきはし君まつかゐる身そくハ世をそめにし法師の意なるへし

人も見ぬ春や鏡の裏の梅

一書に云伊勢物語「月やあらぬ春やむかしの（此古哥）なしぬ家身ひとつハもとの身にして人志らぬ藪の

梅の清香鏡の裏に匂ひて鏡の見得しさるハ只人にも志られさるこそ哀れなれ梅に家あるをたとへさるなりと

下ながれハ略す

一書に云鏡の裏の梅それ句と見へたりされとも家ある乃徒をと見知る人もなきハ千貴鏡のうらに梅の花なし待ちたるハあれとも都に世の人の鏡乃面ハ見れどもうらにある梅ハ見る人もなきぬく世にしられぬとの句成へし

一書に云深山にハみ雪降らし難波人ハ風志ある香業竹にある比難波を鏡のうらに引返して鏡のうらと云しても見ぬといひまひらるといふ

香業草とハ梅の異名之

一書に云世の人にしられぬ身ハ鏡のうしろに隠れ住しく梅と同しくあし鏡の面たしかハなき

しりよ人にまで知られて騒しかるべく口惜かり
むと安き身のかなしさを比して其の吟之中略
鏡の裏の梅椿のうへは源信明家集にもとしの
かゞみと讀みてのがるもあるは之まさ俤野々宮集
に鏡の裏に鶴の形を鋳つけて作りたれハ詞によそへて
よめるハいのしむかしにさきむ回雪のかゝへぞ見るべき
なる今後明らかに此奇を本拠とせられしかハあらぬと
も此ときに叶ふべきとハいひがたし鏡裏の紋を見て思ひ
出されしさまあらハ又梅花鏡とて古物の中に梅花
の形にあらわしもの又あるは後明かなり古鏡にも此すがたあると云ミ
一書に云墨梅の詩に瘦損昭陽鏡裏春と云ミ
一書に曰さまざまの説ありといへどもみな皆なりて穏當ならず此
いふ人ハ易に艮其背不獲其身行其庭不見其人無咎と
いへるを釋く 近思錄存養類程子曰人の其止るに安む

ちるをるは離さる所以の者ハ欲に動けハ之中略 此鏡の背の梅
も則人の背なし背ハ止所もとまるさだまりてすれハ但に
出しいさゝかも思慮なくしてともに隨てうつる其
背に艮るべしやハ見るものゝ背あるにつけて色男なきところ
を知るべし見之 蓋此古傳より求出せる一章にハあらし
鏡の裏によるものハ雅も見るべし見れどもそれと言を
附されハ是ならず所詮なしと云ミ
会昧堂主人屋原楚碑雜録に曰世人不知鏡裏梅此答ハ盤珪
禅師いせの國鏡のうらに墨梅しあつるを詠ひその咏

玉葉集に

月を見ぬよしをきこの裏にてもすむとも月の影をそ之く
明るき夜乃不のゝほまらぬ　姫ら君

一書に曰陰者よ人家の折に灯をかゝげて来てすのかゝ
画をとひつゝ去来ら湖東問答にも此ありて梅をそゝるに

五元集拾遺に裏の部に入ハ非也今案に寒菊の部に有
出して改とす
湖東問答に云其角か嫁か東の方ありにけり嫁か君
ハ万編嵐の文に一説に大年の夜大黒柱のもとに穴を
灯し鼠を嫁か君といふよしありけり思ふに嫁か君に擬け
する灯明めてし流ハ大年の夜元朝かけて嵐の
事を嫁か君といふにやと此説をあげて嫁か君ハ
春季ありて嵐乃事なしと野坡かいへりとあり
愚考其角句解の説ハ一向取に足らす野坡かいふ嫁か
君ハ春季にして嵐の事なしとハ然らぬ説也予か見るところハ両書
清原大勝いふ縁つむい縁ある本諸季集あまたの説を調とゝのへて
歳旦に用ひ来るハ是新年の祝言之嵐といふべし
なるへし嫁か君にて調と覚えて歳旦の句とせしも押
おしつるハ其角か清勢人此勝の見かぬゆへに大黒

柱の歌にて春季のよし僻説をいはれたり此句昇枝
にして十年とこしして其角に没せり五元集に
も歳旦の部に入たり大年の夜の句とせば何そ春
の部に入むや文意を嫁といふ事ハ経説據に
なされハ誤りて違ふるなるべし
　猿の世阿弥祭や　青かへし
愚考世阿弥ハ観世大夫か二代目なりよつて
ゆかりあるよしハ祭りしせり大和国結崎に住し
たる四座の一人にて観世観阿弥ハ東山殿の御時乱
舞の祖也二代目世阿弥といふ二代の名を合て
観世座といふなるべし
　神春や年ハ若狭乃　白比丘尼
公名云本朝列仙傳に白若狭の国に白比丘尼といふ
ものあり其父山中に入て仙人に逢ふ仙人より人魚を

いつものことにて云是を食すれハ時ハ老せすしてし
命甚しく家に帰りけれハ彼女子是を食して
四百余歳を経たりといふ 同国空印寺に八百比丘尼の木像有と云云

暁乃雹をさそふやほとゝきす 其角

愚考 ヒヤウ之五雑組曰雹似二是霰之大者一但雨霰寒
而雨雹不レ寒霰難レ晴而雹易レ晴如二驟雨余在二斉魯一四五月
之間屢見之不二必冬一也史書所載雹大有二如二桃李一者如二鶏子一
者如二盃盎一者如二斗者一されハヒヤウをあられのよしあり
酉陽雑俎に曰木丹花夏有レ雹又慶安二年五月十三日武州
川越に降し雹ハ大二寸小四十匁あり人馬多死

葱の花ならしむこゑや 郭 云

愚考 僧聖徒か詩に燕子辞レ巣始到レ家杜鵑帰
處在二天涯一是等の意にも似たり

渋うりも穀田すりなけり 杜宇

一書の云京の都にて牛なきたるを時鳥鳴田に
帰者のうしみしよこの子
愚考是を食の奇と探しのこりあり方飲に例あり
時鳥渋の家をあらわしつゝく帰してけらむ
わかしき渋の中にあり乃しまくあるふへのきさるに

暁る不やよこりつゝる 蜘の巣

愚考夜巫蜂「気せこう来るさ宵なりさかよの家の中れ
ふるゆひかれて、ゑるしも実に明る人の雨冷さるも気つく
まとつて 西京雑記曰目瞤得二酒食一灯花得二銭財一乾鵲噪而行人至蜘蛛集而百事喜

和らつや 裏つゆく 分 すゝ

愚考鞏里乃漁乃も乃職に鮑と書てむかし鮑なり
去漁の人にてすゝるに有鮑と見へたり 和名抄ニ鮑

職人の帷子 ふるゝ 分 もくみ

公石云 古今の帝に高人のよききし帛をものうく

体しつらぬしと云るなんは合ぬるものとあやし

粘になる　蚫も　秋の　暑かな

是等夏月の暑に乾る蚫は粘の用なり
神膳祭の備にも蚫となる極の沖も静になれ
伊勢のうらの姿なり

ありかたや　蚕飼人　桑の畑

一書に云五月の頃なれはよのつねにはみな人ごとに常
るなるあはれとも蚕するものは桑畑にありて桑の
葉を取る我はなしにて是何をなれは蚕のつとめとして
ひ飼し人ゆかりといふころを蚕飼人しとなく
作りより蚕の飼つとめつは意しと云く
是考へ蚕の中にといひ飼つとみるは人の有の有る是
ゆかり是は別蚕の飼ひ蚕の織縄のよかしめを
飼ついふなりありける女の化は蚕も来るなりて

是中りに哀あらぬものとしとしへし
十論為辨術に日故翁の発句をは附句をも
古詩古哥と識へるは老くしてありさまなれは
其詩と知りさることを考ぬる時は皆ぬとらぬ一句
もなし當時は精学者作者達は世界の人乃
知ぬなりをして集を人にみせあらしむといひ
りなることろの贊をもあり附に故翁の句の餘は
ひめし白氏文集を見て老鶯と病蛍と云ふあ
この詞のおもしろされむと云く

うぐひすや　竹の子　薮に　老を鳴

ありかたや　蛍　ありし　桑の　畑

かく此二句とつくり得りしも鶯ハ筍窺ていひ
て其鶯の余情もいとしく侍りけむ蛍ハ熟液と
言ぬ人ハ心のをしひをとえてそ言すまじれあれ

莚の一字をいれて表に聞えたるもあれどもその名に
まよひ中務とし例の拾遺集に入たるより今ま
真集と偏むる事ハそれらの兼忠おぼえれハとそ後も
詠つる莚とあるハ故実にも古き事を及ぼすまじきを
思ふと載入の徳とすべし
無宗書云萬葉集に定家卿何事も常の作ぞ藤よりまさると
鳴しこて

きりぎりす　鳴てさわぐ　蝉の声

愚考陸雲が蝉の賦に蟬有五徳頭上有緌文也含気飲露清也黍稷不享廉也不巣居倹也應候鳴信也きりぎりす来て八信之速に去ハ候ふりむも土用を候て鳴出す事にて止ハ信出たり

文度も秋の中ハいかに外

愚考後漢書に曰楚王細腰を好みて宮中の女餓死するも

のなどありとのや見る籠を結むものなるより見よのるりもあらひ合されて相つまりて見ゆ

穀食白飢　萬葉集曰吾妹腰細之須軽娘子之其姿之端正（淮南子曰楚王好細腰而民有ウック飢）

ちらかや　麦くらふ　ふ夜て　蜂一匹

無宗書云山崎中納言持まうて百舌の鋤とりて曲寛にうけ維子と號て蒔菜をさけしめけるに出れハ後借誰なるきゆへの今その生風をかりて去年し上方より山藤の盛をもとりて出すも川柳の今に

沢潟や　花つけかゆる　秋のあと

愚考新田義貞朝臣の軍兵に曰若人道に迷ひて方角を失う時沢潟の葉の向ひ生ける方へ赴くべし必人家をかるべしされハ沢潟を侵に無路をかえぬるなるべしは一面に花つけまてぞあしらかに踏知るもれハ秋の後とハ作せしならむ

晋淵明をうらやむ

窓形に昼寝の台や簟

一書に云晋淵明とは淵明をさしてあらて扇面の画賛なりと伝ふ曰淵明為ニ彭澤懸令一時郡守遣ニ督郵至一吏白當ニ束レ帯見一レ之潜歎曰吾安不レ能為ニ五斗米一折ニ腰向ニ郷里小児一耶即日解ニ印綬一帰去此時帰去来の辞有其行を記すなり八十三日にして官を止て里に帰るさ枕をたかうしてしかも帥もて甚涼しきさまを翁のうらやみ玉ひけりとなり

愚考ニ解云淵明の詩のみにして更に養白のご味なし是ハ彼淵明が五六月中北窓下臥遇ニ涼風暫至一自謂羲皇上人是をとしてうらやみ給ふなり山谷が臥陶軒の詩に陶公白頭臥ニ宇宙一北窓又笑苑類藁ニ曰采ニ菊東籬下一悠然見ニ南山一其影神之篇皆寓レ意高遠蓋第一之達磨也又歐陽公曰両晋無ニ文章一幸獨有ニ此篇一耳淵ハ二姓に仕むことを恥て宋文帝之時義ハ卒して年六十三靖節先生と謚る謚法に曰寛レ柔徳安レ衆を靖と云或曰恭己鮮言或曰寛楽令終各靖と云好レ和自克を節と云是等の意味とみへし

名月二句の評なりけら

今のこのむ所の一節に後あらむ月のかゝくるみや

そもそもひかりを花とちらしけるに

愚考ニ新古今秋の部に月の桂のみやまなるひかりを花とちらしけるなりとて月に花ありと之

と無えりを花としちらしまたなかりけりて実をなしぬ

とらへ奇の意を書るなり光りを花としちらしたるを

読ハ桙の句しかし是ゆゑを花とこそかひたる句之

りのくしの今根とそらむ　月見かな

愚考露沾ハ正ミ内藤下野守 五万石を領せられ
者ゝの澗平人の句にてあり
山るれちつとも春めや岸の月
愚考哥ニ見えて来てよるハ易く山ゐるのかけ名
附て言ハ明れ月白山ゐるハ秋の樹に岩を隠ある
会ましてみゆるくり明月お清光を見えと號ひ
てもつとも春を明ともむとらに意なるへし
家に之老女ゐるつありし又
羽陸ニ秘して侍へ侍りしを
如りいまて
姨捨やみよの行々や峰の月
愚考之老女をて姨捨桂姐閑寺之猿楽家の侍
るまて見えと侍く曳業ハ関まの行る是とらつ意
ゐて素りる休

川よりも川りや月乃友
孟子云孟子ニ曰従流下而忘反謂之流従流上而忘反謂之
連とら云ゝ流連荒亡之楽行
秋水の雲 きもしくや星の新
愚考七夕のふまる糸のし続しぬく牽牛
織女乃銀河の秋よりそ行ひそ作より回織活法
ニ曰紫安縣乃武夷山ニ名秋岸有て秋水のふし
ふのやされハ秋水の雲と作しもまく写くゐ皇
七夕をいりそる 神行 祝つへき
愚考長明四季物語ニ曰七月ニあきれハ大宮うり
ありし何る御遊ゐ連おのりきあし奇よみ続
ぬ限りいかりてもよみさしくるもありて又ゐあと
私や奇とも続りひみちりしきと一日を頌やすく
一いろをのみ叶へ玉ふそらうハんせつきの神をなりりゑ

くちもちかなくさ美濃ほどはちひそしても思ひのくしる
しらずもかくるなせりさ許ちまとはいかなる移ひの袂よ
り移ふつきしらむ
女郎花移ひぬ　馬骨　乃すきそ外
長君めらふ花ハ女子の異称よ讀ませり女性ハ弱て
花添くかさましきもののなれ大年老さるハ馬骨の
なよ例きらくめ句作集へし彼男そのめらふ花の
一所へく移るといひしも此姿なり
め郎花　鶉坂の袂よたくかれ子
公石云是則女子よ対しその句なり越中鶉坂の
住ずて秋夏よ男と抜る万数移枕なくりて女子を
おくしとそ
さよ飛のなすりもゆりしつま移花
一書云李草よ律万称花凰紀ミ信男鉢ヶ彼丈

信ず老く夢ひての未来くのなすりもゆりしつ
ま移花とハ無しらなのなせり彼日本武尊の鶺鴒
と夢ひて詩書ありも得ハなかりてあつまくしとなまり
りよらと抄そして作るなりの名
再考小文庫よりそ
[redacted]
彩形や丁の暮る時移哉し
抱儀云古今集よ秋の秋乃露とハ法なそ垂な
こうか丁の调や野边を染るもゆうそのくいかくし
ちそく
暮よ　志かれしくや　髪帽子
玉咲吉云よ藏集の詞書よ倭成御粉衣とおて
世のきのみ字と説しあひし伊ヶ髪帽子をそ
公卿の白きものくりそぬ云
秋の野や　若く新しきりけり

一書に云玉葉集にまつりくれば明日よりの秋の哀をなし
月のみけふける御堂守の為にとよめる歌あれとも
受まうる事さるにあり射すの声をあるものを
しらへける楸浩の浩鼓く
老の名みありしを見ては早雀
一書に曰かね羽の尾乃寺に新めの音につくして
まうれの有しことにおりひもかけてきるの明むも
何かりしかとめのしめ秋の風
一書に耿湋が詩に古道少人行秋風動禾黍の有
も有つしむ
松の声や 御つきさも 例の秋の声
是は欧陽永叔が秋声の賦に云星月皎潔明河
在天四無人声声在樹間曰噫嘻悲哉此秋声也これは
松風琴をとしらるたしの待之

綿書や 闇のくれの位の声
公石云五位鷺の類は夜なく光ある故なりとは
闇の夜に飛ときは綿書とかけ合せるものゝ
とみへたり
森速りに扉鷺は暗さ外
五将云西上人山間の菴ちかく 暗扉の音に
驚かされてあるはひうける寺の人もあしぬ
つし
農業
記しやし 人は遊びてはの花
一書に云記しやしとは新物切記し 位まゝく
それは農因に作るものの事は こそれはの花盛を
以て切記しの人与に絶て遊びなとなり
伴ひの牛従に家をもつまて

そハまた花でもてなし給ふ山路に
発句端書に伊勢の手洗と書し発句書かきてハ
別座せよといふところなくて叶ハぬ句く芭蕉句
選ぶにしもハ似もしたと有さて若やすハ似の身に
寸之句意ハ慈鎮和尚の似てんハ似せに成る人は
こつれて候りけれしき花柑子ハ似もしせん弁
返して似せより柑子の花くと返り御さる也といふ事
いせ人の身より出たる宿額によれはと花で見て阿まさし
いへる意也句なりけれはおし書にあらわすとこゝめて
見るべきなるべくすべて端書有句ハ端書に添も縁ハ一句
立かぬ事ハ詩哥連俳ともにおなし　端書のなくても
聞ゆる句に端書するハ所謂蛇の指帆足に等し
かしこむりのよし
きつゝや西風上戸の花乃こと

発句摘(ツリ)ハ池に大なるといふ人の譬有
して大上戸盛よし　呑仲間まて大堀に蛇蛻
城意源かむかしいふ書あれり画の蒔絵に蛇蜂
盤なかむかしと画りし蛇ハ呑まらんと云蜂ハさすし
いふ意盤ハ着くを嫌むといふ意なるらし叔西風上戸
となるハ大酒を呑れわるき上戸をたゝくといふ上戸盛べき
まや西風ハ少たくまきて熱をさるものなりはなく
いふなる
　元利し　子や　なまし白菓乃　玉杜舟
一書に云蘭ハ蘇菓といふ玉ハ子(コ)之杜丹としるして
子といふハ蘇菓の蘇かく見れハそれ無利し子
なしきや白の人のよみて花やにも白菓の子としれ
いふかやと解めさるなり
むかしいきや　かくる山路の蘭が露

此発題に画屏と有り膾とりて白の魂とかし
ハ此画屏ハうつれる絵の樗様なるへし後家法師の息
かの面影に思ひ比ぶる事に侍ふぬる事を定せり切膾
のことハ東鑑に曰建久四年五月十六日の處に富士野
御狩之時将軍家督之若公始令射鹿給中略狩野介進
勢子餅将軍家並若公敷御行騰於篠上令座給云々此
くハしくハ東鑑に巻狩の画屏ともうかゝひ知れると
閲して知へし　禮内則曰謂之福蓋諸候邪纏於足以見天子者子事父母然矣

虎渓や背負ふて帰る秋の暮

又芦曰暮秋の淋しさをせなかへて帰る侘つましうして
秋の暮を負つくしところ

梯の景に焼味噌贈む暮　之答

公石云家にあきしハけにめる飯を菜なくて梯に
しあまりしハ梯のなきまゝるけ奇の侘よや

稲つまや顔のところ薄乃穂

芭蕉行脚記に曰骨相親の名を家に書と有
一書に云秋風の吹につけてもあなめあなめしとのたまへ
いはし薄生たりしところの人も侍るやといへ
一書に云あなめあなめの歌ハ元来ふかくさの句之げ嵯峨ハ
世に一休髑骨と云ふ出ありて髑骨ともの龍驤の
画賛し拾へさせよりしし男女配偶の氣ともなし服
しに給ふあらくして一体の遊奇ひなくありて
句ニハ嘲りなりしといふ
画賛家書にむかの龍驤と梅とをしつらふ見と
かくさるもことの生家を売めきるもの多かりしハ撰集
撰に取られ書けるとうけての文法なりし句の意
別撰集撰の弟子ら故事をとる夏の骨ある観之深の代
に仕へし帝のとしつきの來年歌道に逐ひて育

ありしの一ツの茅屋有内にいとうつくしき女の琴を弾
てゐたりき一首を吟じて其形を晦しけるに跡には
名も見れハ露ふかき一むらの薄の髑髏其中にあり
ける人々は尋ねし問ふたまふに是ハ採題にくる女のごとく
生涯琴を好みける死後にも魂此の猶りて称し
有事しと語りけるしかし稲妻やと舞しやてなけれバ
雷光朝露の儚きなる色あり無の虚しき事かとて見え
しハ夢なるか扨もその世の中や　窓前蛍雪の学び
し数の所の薄の穂先と眺しいとあはれ
の哥ともいふハ曲もなき妄説之此問答の連哥
なるも八歳やうしてつくむなきもすしも籠
を難き見合なきは琴曲の事なきそて自作
やしきこなけり小町業平の問答の色に解め為
に虚説迷ひしも小町か髑髏に薄乃生しめける

とあなめくといふ哥ハ出しあり続けるを業平の上句とな
さしめむか為に小野とハいはじ薄生けりハ大
野なるへしと云語める連哥のところ集乃なき
万葉にもその大野の薄とよみて薄ハ大野に
しそ生れ小野なところは薄かといへる談なり
ゆへに此儀ありと迷ひつの此彼採題めか
傍に攻手へし将にハ事有数の所見と濁て
よむへし其ハ書あり言語同断てにをは
なきも志らぬ萬葉乃説に迷ふるなされや
とも切てみとも切ものなきあはれよくしてそを
たる信お伝して思へしむかしの実なりきけるも
あはれ数の所が薄乃穂先と会にうつかひを
へよ実白し事なき云髑髏を枕としてとある端
書ハ荘子乃語を含めり荘子之楚見空髑髏

髐然有形 中畧 援髑髏枕而臥夜半髑髏見夢
曰子之談者似辯士諸子所言皆生人之累
也死則無比矣子欲聞死之説乎
りのくさり人と年よれ初時雨
一書ニ云初時雨此淋しき仲をなき人ハ今も
つゝりし年八世の人ニ年をとらせて記をとゝせ
さしとのこゝろなり

更る夜や残りつる一時雨
一書ニ楚玉圃裏篠中夜をとゝの仲まや云く
元禄辛酉神無月九日素堂菊園ニ於
是考元禄辛酉ハ非也是ハ癸酉ニ而元禄

六年癸酉ニ宜ありし辛未ハ元禄四年ニ而して八月
因あり元禄六年八九月ニ菊ニ七月里年五月宜なり
ま菊花いさゝ罪くなしき元
菊の香や庭ニ切たる沓乃底
一書ニ云菊花を愛して猶菊花乃類ひハすく
なし菊ハ一とせひの後てなまけ昔より色のうつ
ろひ行まで愛しめ人天暦の御代の孫九月八
延喜帝乃御意ニ南もゝ玉人よつて九月の宴
をとゝめて十月ニ残菊乃宴行ハせ玉ふ延喜の御代
ニも残菊乃宴行はれ侍しとも是ハ秋のうらなる
さる夜ニや寄年よめる残菊ハ秋乃あはれを
冬のはしめにもありて一層あはれすとや
愚考鶴林玉露曰晏子一狐裘三十年長孫道生一
熊皮障泥數十年蓋貴而能儉 若蘭凋明

十年著ニ一對ニ言ニ其實ハ也是ホ乃意を肖ニ於てあり
陳せぬ那りね作しぬ菜乃友
且考ふ揚出に栗里の隠士として陶淵明あり栗里
ハ尋陽縣にて隠栖の地なり無絃乃琴ハ淵明の
ゆきよくしろなり人見竹洞先人ハ元禄中の隠儒
にして古着石を領し聖堂結の名路なり
一家も古ゆきぬ蜀乃琢外
一書に云ふ上人接やうて念を地しある人ハらふて
く乃さかえかそふして汲るなり
蝶夢云揚出に趙南とありて非なり 長男乃
書換なり史記列傳に委し范蠡ヶ次子罪を
負ふてりうさ金をもて云み罪を補へとてよ
長男ハ金を惜みて救ひなかりしと云よし
この意をふまへんの述たるなりよて一家も

古今そぬ人例乃長男の意味やすくさくなるを句
作るなり
本かしや芥千吹くるゝ千の声
本らしや蕎麦すらもちに千の角
かくて名のなはよつてくる千乃追風をとり録
こは昨風そさみなる乃二句なり
夷攝郡よりさ蕎麦やよくつり
一書に云夷攝とあるは貨殖乃業集りて持
長漸高の南まりるなしかみの投音なをすし
時の旬しくかくありさしも尋常乃那賣の
蕎麦を日午よりて面白かしと福人乃含
お持ハ州もつかぬ那賣るとしも蕎麦売る
よしと一興ともとし付之
夷攝鷺も 鴨ふ 茶すりくる

惡き鶩の鴨に化成しきるといふはいまだへ八
ろく爾雅ニ曰鴨ハ鶩也野曰鳧家曰鶩廣雅を
さして馬といふ人ありけるに鴨をもさしく
となへたり也拾遺集百首集等に見えたり
杜父魚や鰕虎をあやまりて鰕鯊
土由来し古く廣倭本草云杜父魚ハ名かじか
許にかな草拾遺に見えたり方言信濃にて大きな
本草に見えたり是ハ目つきにて寶鳴その魚なり河鹿
山川より出づるに岩につきて一種巨大なるものあり異
魚圖説に所謂角鰭（カハヲコゼ）といふものそれなり越前にて
なる者を健品として大魚本草に云本草
綱目にあり御見えて川おこぜといふ人京にて石も
ちとこまとらてちんこしいふ人喰賊にて杼等白き
魚にせよ子とど杜父（トホ）をいふなるべし爲魚何ま

て道濡しく云江州乃湖にすめる形河鰍に似て色黑く
長さ五六寸あり鰕（ハゼ）魚にも似たり故に名づく古訓にも
よめり一説ごり乃文字なるを河鹿とも云ふなり杜父魚同
類なり○京都乃方言にだんぎぼうずとも云魚なり
杜父魚に似て其形背高し是すなはち杜父魚乃類なり
日本釋名云杜父魚河鹿之山河にある魚なり秋深けて
其聲青し故に名づく信ふらさうじとも云小野
蘭山本草啓蒙云杜父魚又作二杜父魚一又伏念魚
和漢三才圖會 土宰保 同上 一名 鰍 荷魚 土附魚 王氏彙苑 鯸虎魚 同上 土鮪魚
食物本草 吐哺魚 寧波府志 又雜組 ねうりうを 古名 かぢか 仙臺方言 いしもち
蹲水し同名異方云 どんぽ 不能 方言 さげくさうひ 方言 淀方言
かくぶつ 州 あぶらもせ 伊勢 どんころ 紀州 ちんこ 根之谷 らしめすぎ
称んまう とぶろ くちなくどんこ むでまる是等所々の
方言なり杜父魚ハこちにして川にすめる故にかから

なしこれハ志のしずゑ是非実あり又一種ありくこすき給
まして粗なりのあり難かしく菜なり京かまて心より
くるしと云又ごりとも河原と云雛のうちにて何處が別
なり鳴くしと云餘所ぞ夫赤もまたまに見ゆ
何事しも　寐入やそうなり　流　食
愚者鶴林玉露ニ曰林侏莞箪ニ繡食玉枕同一
寝也帝袍蒲ニ繋与ニ貂衰孤貉同一煖也知此則貪賤
富貴可ニ一視ニ矣此意成或人難しつて田ならしさるの句ニ
まう須釈なくとも字ゆゑにとかくや
陳して云ゆへぬとらん句ハ一句まちしこれ据りを
知附るし何そ解也さしむや世人迷をさりて皆ね
なりすり称すりのハ句もと解さず唯其趣を模写しまて
意蒙まつまへて溢敬知新をなて再権中納言通
俊卿ニ於かひてなかしましいすしぜよしくの

かしこき人の玉章新撰古今集をみてより亭が此叙
文を入しぬらんよりかるしひ古人の句を摘る
すまとへしと頗るとしきて此あく
婆人よあくてあしも宵庵の著
拖儀云今世拾人と来りて八景やうものをて
なりしを是非も世をや捨る出柴しみるりこの
寧情ハ天より又
今人云定親は郷の多れてまくしりるや念をく
翁の生涯まかけするまる句情なり
山寺すや猫なり疫る　涅槃　像
愚考義楚六帖曰猫十二大羅刹女中数最能ニ
釈氏作ニ知ニ不ニ可ニ言問者也さまは山寺として猫を
むるひよるを則なつしきなり
潅仏や　釈迦しく抱ぬを彼かし

又云提婆達多ハ斛飯王の子にして阿難の兄也
釈迦ハ浄飯王の子なり善覚長者の女を以て
斛飯王浄飯王の二王に嫁せしむ善悪二道の
かけ合せとなりて白しやり提婆達多大石三十
肘世尊になげうつ時山神金毘羅之を
受てうけとむるに金剛に飛ちる砕けて一小片
仏の足にあたりて血出るとなく

象潟にて　秋来りし白髪の墓　来

一書に云李朝文様に俳諧の式として下の句に
すわれるところのかゝみをとりてつくる事も有と
是も此句に一首の詩を附会して謡曲の趣
よりして句の縁とする解むには藤原載か詩に曰
荊門一別各東西三十一年夢中歳数封書問
あはれ人蒼年竟離窮家人八覚へし不知家人ハ

ゆきるゝし

かまくらの諸寺にまうでゝ
首の歌を輪書のある所に附す
是も徳宗紀に貞元八日遣宗の輪蔵寺より上人刑死に
室りて首の縁に附会して縁しの奇瑞ありける
赦免ありしとぞ首の座石として今に存せり輪書
八段に太刀取の作りしものなり　左傳に曰賞以春夏刑以秋冬といへり
然るに又曰賞ハ月を不延罪ハ年を越へし
後京の書の墓にして其書光寺の古墳に
深しくる　芭蕉にみつる所の
古書に曰神の剣ハ心に似りとや宜なるを先師曰
かゝる句ハ今俳諧に仕立るものなりとぞ又
風雅なるより深みに深く猿蓑探集の附句又
あはれにて深しさのしやさ数多へしとそ

旅人のこゝろにも似よ椎の花

一書に云 乃紫に別おしみける餞を乞まゐらす
旅すしあまたハ椎の葉よりかゝし馬寧せ旅持や
なる旅寐なりし風雅の細みをたゝるその人を
称られけり

説叢大全に云 此句ハ俳字の謂にや解しがたし
許六が韻塞にハ椎の花のこゝろにも似よ木曽の
旅し出すり句解の往一句簡しく解意も融せ
すさも旅人の風雅に似よといふにやまゝさ
りら乃へかたへに唯旅の不自由なる海を
よみたるなる都にて世乃旅人を見るに皆よ限しまた
ら旅にてこそあまた木曽ハすましても山中不自由に勝る
るとふかとい椎もおかくあまたハ湖南旅の椎の
花の淋しく覚ゆるものとふかへ称せるにあらず

ほしまゝに意乃蔓に合纏て書し学力敏も
よ知らるゝつゝしほすつての旅人のこゝろを汲知り
て椎の花乃さびしきよさをゆかしく旅人の
行の風流も面白からめしひとへにちよ無戒を
含めしるなりし州々ハ椎花のハ五器一具
のめき師道乃弟子を憐ふのつきも甲乙あ
旅人をふ許しとしてきくハあしまるり世上の
上略 旅人のあた先年て云わす詞とも見へし 韻塞
椎の花乃心にも似よ木曽の旅人とききての旅
まもなしへ木曽の鐘真句一句にはうたすつきまよ
しゆきしとも含まれてのさめて哀のいへ形見あるやうに
なくいへたるし云く
前ともあるの芋ありてしるや
見あ諸よ日頃蔵こ 貴食我家 三菓貫々安墓

我旨顔遊将去女適彼楽土須亂こゝ爰得ニ我
所ニ志の気ありて古郷にかへるこゝろもなくさすらへ
ましてや芋をば蘭もくれにして只あつのくらまく
されしは又請冥の郷骨須蘭を蘭ありし愛慾せし
なり

論書や淫世をとる 猿曳 やまず
子将去而上人猿康山をさ世をよみてふるてすて
くいつのまなり中く念自然しむさまをハ稲書あ
乃あくあるまのり満身りと観し こしむりの
とを

文の春の扇ひらけハ猿去らし
画巻垂れ上人二足よおそれし以当をと文墨をし
て気分を縁し玉ひたむさの傍なるべし
椒に棄る情や梅に小豆粥

抱僕云天平御覧曰正月十五日作ニ膏粥一以祠ニ門戸一
又事文類聚曰別里風俗正月望日祭ニ門先以ニ楊枝一插
門隨ニ楊枝所一レ指仍以ニ酒脯飲食及豆粥一插レ箸
而祭之又拾芥抄曰正月十五日炙時煮ニ小豆粥一為ニ天狗一
祭ニ庭中案上一則其粥凝時向ニ東方一再拜長跪服之終年無ニ
疫気一端出るとしるハ白気ハ明らかなり
云事根源曰寛平年中に始て貴ミ

布くりて名をなのしする時あるべし
はるの名文字香りしてと読書は芳やかり彼さける梅
柳のきりるの梅も細く一応にハ中のべ芳りもさ
まち深き家に到るてはしまの有是梅
かりての宵よりのくぐら作方より探求に象を
きしても布し往ハ一句乃観句ハ嬉くそうし
先高きを知りて探求に兼ての風流を名号

さくりのうり守宮様文乃奇よ宴遊や狂筆の
人乃ありとけて書うりとめの覧ずし／＼もかあじ
疑惑をとなさまとらん

月院社藏板

七部解大鏡　全八冊

續猿蓑注解　完

再考近刻
七部解小鏡

月院社藏

文政六癸未年十二月

京都書林
中立賣堀川東江入
浦井德右衞門
寺町通二条下ル町
野田治兵衞

東都書林
日本橋通二町目
野田七兵衞